

明珠

龍泉院
參禪会会報

從容錄に学ぶ (三九)

第五〇則 雪峰甚麼

〔示衆〕

衆に示して云く、末後の一句にて始めて牢関に到る。巖頭、自負をもつて上は親師を肯わず、下は法弟に譲らず。為復、是れ強いて節目を生ずるや？為復、別に機關ありや？

〔本則〕

挙ぐ、雪峰、住庵の時、両僧ありて来り礼拝す（香を尋ぎ氣を逐む）。峰、来るを見て手を以つて庵門を托き放身と出て云く、是れ甚麼ぞ？（此れ猶はお抛身の勢、隱身の勢は作麼生？）僧も亦た云く、是れ甚麼ぞ？（果然して識えず）。峰、低頭して庵に帰る（無語と道うこと莫ければ好し）。僧、後に巖頭に到る（消を伝え息を寄す）。頭問う、甚麼処より来る？（鑽たず穴らず）。僧云く、嶺南より。（這裏は嶺北なり）。頭云く、曾て雪峰に到けり

や？（熟処は忘れ難し）。僧云く、曾て倒けり（更て諱し得ず）。頭云く、何の言句ありや？（醋かずんば休めじ）。僧、前話を挙す（二字公門に入さば、八牛に拽げ出せじ）。頭云く、他は甚麼と道いし？（却つて低頭して便ち出るが好し）。僧云く、他は無語にて低頭して庵に帰れり（甚麼なれば則ち曾て雪峰に到かじ）。頭云く、噫、當時他に向して末後の句を道わざりしを！（而今は道い了れりや？）若し伊に向して道わば、天下の人も雪老を奈何ともせじ（何ぞ我は便是ち雪老なりと道わざる？）僧、夏末に至つて再び前話を挙して請益う（好き酒は人を醒すこと遅し）。頭云く、何ぞ早く問わざる？（瞌睡に貪る）。僧云く、敢も容易とできず（可憐叢林に慣れり）頭云く、雪峰は我と同条に生きたと雖も、我と同条には死せじ（另を索むる者は先に窮らん）。末後の句を知らんと要ば、只だこれは（旋く蒸熱して売れ）。



今回はかなり長い則。『從容録』で雪峰義存が中心とされる四則のうち、もう今回でさいご。とはいっても、この則も第五五則と同様、ワキ役の巖頭全藏がむしろ雪峰以上の力量を示すところが共通しています。

禅門の流れの上で、雪峰は雲門宗と法眼宗の祖たる地位にあり、また複数の語録が伝存しているのに対し、系統が絶え語録も伝わらない巖頭が、年こそ六歳下ながら兄弟子であり、しかも悟りの内容が深いのです。

たしかに、『示衆』は万松さんの巖頭への賛辞です。要約してみましよう。

「ぎりぎりの言葉によつてのみ、生死の関門は開けるのだ。巖頭は師匠の徳山だろうと弟子の雪峰だろうと、安易な妥協などせん。彼はただの理屈屋か、深い力量のあつてのことか、わかるかな？」

すごいですね。つぎに「本則」の要旨です。

「道場に入門を乞うた二僧に対し、雪峰は門からとび出して、“これはいったい何だ？”と示した。僧も同じしぐさをしたので、雪峰はうなだれて戻った。後に僧は巖頭の道場に行つてそれを話したところ、巖頭は“ああ、昔ワシは雪峰にギリギリの一句を教えておくんだつた”と嘆いた。あとで再び

僧が問うたので、“ワシと雪峰とは兄弟弟子だが違う。ギリギリの一句とはへただこれのみじゃ”。

こんなところです。ちなみに、巖頭と雪峰はともに湖南省徳山（常德市）の宣鑒和尚のもとで修行し、宣鑒に嗣法した神足の兄弟でした。後にそれぞれ開いた道場は、湖南省北部の洞庭湖に近い巖頭山と、福建省福州の郊外にある雪峰山。両省は直線でも八〇〇kmの距離です。ですから、万松さんのコメントの「嶺北」を「コナン」とルビしたのです。

同じく「熟処」は雪峰とむかし修行したところ。「二字公門に入さば八牛に拽げ出せじ」はウツカリ発言ができないこと。総じて万松のコメントは今更ながら深くて正鵠を射、すば



雪峰義存禅師の真身像(雪峰山崇聖寺枯木庵)

らしいの一語です。

さて、この一則の中心は「最後の一句」！

禅門ではよく用いられ、ギリギリの絶対で究極的な一語のことです。この則では雪峰の言葉「これ甚麼ぞ？」と、それに対する巖頭の「只だ這れ是」がそれに該当。じつは、雪峰のこの言葉はかれのオハコであつて、人間が現に生きて存在している根源への問いであります。これをマネした雲水に、雪峰はガツカリ。それを聞いた巖頭は、雪峰の教育者としてのあり方をとがめて、もう一言ギリギリの言葉を出して指導してあげればよかったのに、それは「只だ這れ是」と。

両者の言葉は、いずれも具体性のない副詞や代名詞ですから、何のことやらわからない。そうです。真理やさとりの世界を具体的な事物で示したら、もうそれだけになつてしまふ。ですから具体的に示さないのは、示せないのです。『正法眼藏』恁麼の巻でも、恁麼（そのような、このような）とはさとの境地であり、深い智慧の世界ですから、それを倒地・風鈴・風幡・碓米などの有名な故事を引いて教示されていきましたね。禅師は「道得」の巻で述べられるように、どんな真理でも表現できるといふ立場から和文で縦説横説される。それが『正法眼藏』なのです。私たちも、良き思考や体験は、できるだけ具体的に客観性をもつて語るようにつとめたいものです。

転法輪というは、巧夫参学して 一生不離叢林なり

第二一回・一夜接心

今年で第二一回目となる一夜接心は、六月一〇日(土)・一一日(日)の二日間、二八名の方が参加され、龍泉院で行われました。

一〇日の午後二時に上山し、七炷の坐禪と、椎名老師から『正法眼蔵』『転法輪の巻』のご提唱、それに朝課や作務など、例年と同じ行事でしたが、参加者の方々は皆充実した気持ちで、下山されました。



典座は、今年も松井さんが引き受けて下さいました。一夜接心の典座は今年で七回目とのこと、参加人数に合わせた、お料理の材料の分量はぴったり用意できるよ

うになった、とおっしゃられていました。

禅講では椎名老師から、「転法輪の巻」は短だけでなく、『正法眼蔵』の中では非常にわかり易い一巻ですが、道理や宗教的な意味は非常に深いものがあります、とのお示しが最初にありました。しかし「転法輪の巻」の最初九行は漢文が続き、難しい感じがしました。「首楞嚴經」でお釈迦さまが示された「一人發眞歸源、十方虚空、悉皆消殞」について、如浄禅師を始め、いろいろなお祖師さま方が、コメントされている部分です。

このように、多くのお祖師さま方が「首楞嚴經」の言葉を取り上げて、コメントすることにより、「首楞嚴經」が仏祖によつて転ぜられることになっているのだと、道元禅師は述べられています。

さらに、「転法輪の巻」の最後で道元禅師は、「転法輪トイウハ、巧夫参学シテ一生不離叢林ナリ」と、締めくくられています。即ち、道元禅師は、禅道場を生涯の拠り所とすれば、転法輪することができると述べられているのです。

二一年前に迦葉山龍華院から始まった一夜接心も、この一〇年間は龍泉院で行われるようになり、坐禅や寝食など修行を共にするこ

とにより、会員同士の間が短くなる功德があるように思います。

参禅会員は血を分けた兄弟ではありませんが、仏祖と兄弟になることにより、仏法の兄弟となることができます。椎名老師も「肉親の兄弟よりも、法の兄弟が尊い」とおっしゃいましたが、その通りだと思います。

初めての「一夜接心」

白井市 根本 保

相澤さんのご紹介で今年一月から「参禅会」に参加させていただいております。特に信仰心が強い訳ではありませんが、何故かお寺、仏像、坐禅には心惹かれるものがあり、退職したら「お寺参り」をと考えております。

一月の「参禅会」は豪雪の翌日でした。すつぱりと雪に包まれた龍泉院本堂での初の坐禅は、絶好の修行の場となり、忘れられない貴重な経験になりました。

今回の「一夜接心」もご案内があつて即座に申し込みをしました。一日目の土曜日、午前中は蒸し暑い中、少年野球の指導をし、昼食もそこそこに慌しく駆けつけました。お陰で坐蒲を忘れ、前途多難を思わせました。

その危機は一炷の時に来ました。週末の疲

れか、気の緩みか、睡魔が襲ってきました。
「まずい」と思ったその時、ご老師の厳しい
「喝」が入り、眠気は吹き飛びました。その
後も鋭い警策の音がする度に体中に緊張が走
り、「参禅会」より一〇分長い坐禅を、無事に
乗り切ることが出来ました。その間、初めて
の「警策」もお願いし、体験しました。

また、「薬石」の時、恥ずかしい失敗をして
しまいました。美味しい沢庵を早々に全部食
べてしまったのです。初参加の鈴木さんも同
様で、二人で苦笑いでした。

その上もう一つ、間違いをしそうだった事
が最近分かりました。実は食事が美味しかっ
たのですから、「美味しいですね」「調理は
大変ですね」などの言葉が出そうになりまし
た。ただ、皆さんが黙々と食べておられるの
で、なんとか抑えておりました。

先日、五木寛之の「百寺巡礼」の永平寺編
VTRを観ていましたら、食事の場面があり、
五木氏が「食事の時は沈黙が決まりだそうで
す」と言っていました。ホッと胸を撫で下ろ
し、改めて「沈黙は金なり」？の格言の意味
を感じた次第です。

何の作法もわきまえずに参加したことが恥
ずかしく、反省をしております。それでも曲

がりなりにも無事務めることが出来ましたの
も、椎名ご老師をはじめ役員の方々、そして
参加者の皆様のおかげでございます。深く感
謝申し上げます。 合掌

一夜接心に参加させて戴いて

我孫子市 服部 純雄

初夏の爽やかな日に、一夜接心に参加させ
て戴き誠に有難う御座いました。ご老師始め
幹事の方々、皆様のお心の籠ったご指導に改
めて感謝申し上げます。

感想と致しましては、木目細かい日程の運
行、各食事の美味なること等、始めて参加さ
せて戴いた者と致しましては、感謝と感激の
みであります。何か次回への参考になる改良
点が無いかと探して見ましたが、見当たらな
い次第です。

唯一、これは個人的かつあまりよいことでは
ないかと思いつつ、ご質問いたします。そ
れは、四柱目位から足が痛くて、その事ばか
りに意識が集中して、早く終わらないかとの
み願い、坐禅が嫌になってきましたので、結
跏趺坐を諦めて半跏趺坐に直しました。

するとまた坐禅が快調になり、いくらでも
坐れそうに思いました。これでいいのかなと

思いましたが、いいのでしょうか。

次に、ご老師の「兄弟」の御教えは、仏教
にそういう考え方があることを始めて知りま
した。血縁者との交わりも現代の都市型社会
では薄れざるを得ない訳で、参禅を通じて楽
しい交流が大切な事と思います。

月に一度では寂しい気も致します。例えば
毎週日曜日には参禅させて戴ければ有難いと
思います。

一夜接心

柏市 鈴木 民雄

平成一八年六月一〇日参禅する。山門再建
落慶法要のお手伝いで参観した法要の一部を、
自分自身で体験させていただき、感激しまし
た。そして、作務を初めて務めさせていただ
きました。

山門再建の記念すべき日に参禅したのも、
何かの縁と思い、自分のできる作務を続けて
行こうと自分に誓いました。

一見似ている譬え話

千葉市 寺田 哲朗

今年は三月から『正法眼蔵』札押得髓の巻
をご提唱いただいておりますが、五月に「・・

かくのごとくの癡人、いたづらに父国をはなれて他国の道路に踰跚するによりて、仏道を見聞せざるなり・・」という一節を拝聴いたしました。

これは「法華經」にある「長者窮子」のお話です。以前にも拝聴したように思い、テキストの書き込みを見たところ、平成一三年二月に「行事(上)」に、「・・なおこれ行事をこころざすにたれども、真父の家卿に財宝をなげすて、さらに他国踰跚の窮子となる・・」とありました。

このお話がどうも気になりますのは、平成一六年にロシア旅行に行き、サンクトペテルブルグにあるエルミタージュ美術館で、レンブラントの作品「放蕩息子の帰還」というのを見たのがきっかけです。写真にありますように、家出をして放蕩の限りを尽くした息子を、父が優しく抱いて迎える構図です。これは新約聖書に書かれているお話とのこと。

ところが、二つのお話を読み比べてみると、いろいろと違うところがあります。

「長者の窮子」は一人息子ですが、「放蕩息子」には兄がいて、弟の家出中父親を助けて家業に精を出すのです。この画に父子のほか三人が画かれていて、一人は母親、腰掛けて

いる方が兄のようです。両方とも長文ですから他にも細かいところの違いはありますが、これらはさておいて、一番違うのはこのお話が何を教えようとしているか、これは両方の文を見れば明らかでした。

「法華經」の方は、「誰にも仏の素質があり、それを開花させる修行もここで今できるのに、どこか遠くにあると思いい違いをして放浪するのでないよ」との譬えだそうですが、「聖書」は帰ってきた弟に父親が感激して厚くもてなすのを、真面目に仕えてきた兄が不満を言う、兄の一般的な常識的なこの態度に対する「神」の誡めだそうです。

弟の放蕩息子は父親に悔い改めているので赦される一方、何故兄はいけないのか、は専門家にゆずり、一見同じ物語でも趣旨が全く別であることが分かったので、何か安心した気分になりました。

似た物語はささやかな発見の積りでしたが、



放蕩息子の帰還

法華經と聖書、両方とも原典にあるのですから宗教家の方々にはとくに知られているのだら

うな、と可笑しくなったのでした。

崇高で優雅な永遠の恋人

弥勒菩薩を訪ねて

我孫子市 清水 秀男

今年の三月、久しぶりに京都に旅をした。そしてまず最初に太秦の広隆寺に向かった。永遠の恋人「弥勒菩薩半跏思惟像」に会うのである。かつてある大学生が、あまりの美しさに近づいて口づけをしようと思ったら指が折れてしまったというかの有名な仏像である。永遠の恋人は、年を取る事なく、心変わりする事なく、昔と変わらぬ清楚で、優雅な美しい姿と暖かい微笑みで私を迎えてくれ、しばし至福の時を持つ事が出来た。

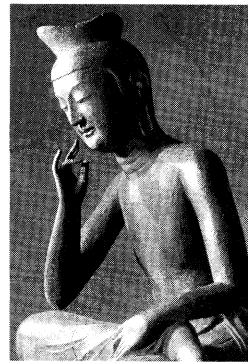
菩薩像は、将来において如来に到達する為に修行をし、大衆の教化に努めている仏の像である。弥勒菩薩をはじめ、様々な姿に変化して救う観音菩薩、女性を守るとされる普賢菩薩、智慧を司る文殊菩薩、この世の地獄に苦しむ人を救う地藏菩薩、宇宙の様に広大無辺な徳や智力を持つとされ密教思想と共に発達した虚空蔵菩薩等がある。

その中で弥勒菩薩は、釈迦に次いで悟りを開き、仏になると約束された菩薩です。現在

兜率天（トツテン：将来仏となるべき菩薩が地上に下る迄の最後の生を過ごす場所）にて修行中で、釈迦が入滅してから五六億七〇〇万年後に人間界に出現し、釈迦が救済出来なかった大衆を救うと言われている未来仏であり、半跏思惟像は、今くつろいだ姿で未来の来るべき理想の世界について、じっくり思いをめぐらしている姿と言われている。

広隆寺の「弥勒菩薩半跏思惟像」の歴史を簡単にみてみよう。広隆寺は聖徳太子建立日本七大寺の一つであり、六〇三年（飛鳥時代）に建立された京都最古の寺である。広隆寺のある太秦地区は四、五世紀から、朝鮮半島や中国から来朝した多くの帰化人が住みつき、農耕、醸造や、蚕を飼う絹織物を作る等、先進文明の優れた技術と生産力を導入し、開拓と殖産に励んでいた。そのリーダーが秦氏族であり、親交があった聖徳太子が弥勒菩薩半跏思惟像を与えたと言われている。（この仏像に関して、年代も含め、当時日本と新羅との密接な交流からして、新羅から請求されたものか、又は日本で製作されたものか諸説ある。いずれにしても7世紀前半に安置された仏像である）。

私は何故、弥勒菩薩半跏思惟像に魅了され



弥勒菩薩の崇高なる姿を通して、微

底素直になる事が出来、本当の自分自身に出会う事が出来るからだと思う。

自分自身の愚かさ、至らなさ、貪りの激しさ、怨み心、残忍性、おごり、自己中心性等数え上げればきりのない、まさに情けない闇の部分の自分に気づく。そして、お前は本当にそれで良いのかというもう一つの自分の声が聞えてくる。更に、悔悟し本当の人間としてのあるべき姿に向って、希望を持って精進しなさいとの声も聞えてくる。その他、私の心を捉えて離さない弥勒菩薩半跏思惟像の姿、顔、表情等の魅力点を挙げてみよう。

・伏目がちに瞑想に耽る、切れ長で優雅な目の深遠な哲学性。

・眉から鼻にかけて筋の通った、鋭角的なラインの深い叡智性と知性。

・頬の柔らかなふくらみと、口元の得も言われぬアーケイックな微笑の無量の慈悲性。

・頬にかすかに触れんばかりの、右手の指先のたおやかな美しさ。特に親指に向かって意味ありげに軽く折り曲げた薬指は、何かに、永遠なる涅槃寂靜の世界へのサインを、発している様な気がしてならない。

これらによって弥勒菩薩は、私を無限の宇宙の中にすっぽり包み込んでしまうのである。

かの有名な実存哲学者ヤスパースは、この仏像を評して「人間存在の最も清浄な、最も円満な、最も永遠な姿の表徴」と言っている。

私は決して偶像崇拜者ではない。弥勒菩薩を通じて、よく自分を見つめ、愚かさ、弱さを客観的に把握し、同時に自分の尊厳性にも目覚め、よく自分自身を静かに統一し、よくととのえ再構築する《よすが》と《エネルギー》にしているのである。いつの日か、又お会い出来る日を楽しみにしている。

「おのれこそ おのれのよるべ おのれを措（お）きて 誰によるべぞ よくととのえしおのれにこそ まことえがたき よるべをぞ獲ん」（法句経 一六〇 友松圓諦訳）

スイス三大名峰を巡る

ハイキングの旅(上)

さいたま市 美川 武弘

この六月、古来稀なる歳を迎えた。吾が身の健康と健全な家族、そして良き友人達に恵まれたお陰と、あらためて感謝したい。

この七月一日から一九日までの九日間、スイスの三大名峰、マッターホルン、モンブラン、アイガー・ユングフラウといった名峰をめぐる旅が計画され、年甲斐もなくスイスの代表的なアルペンリゾートを歩いてきた。アルプスの山々を眺めながらのハイキングをハイライトとするこの旅への参加は、古希を迎えた私にとっては、思いもかけない一大イベントであり、生涯忘れ得ぬモニュメントとなった。

同行メンバーは、坐禅仲間の大坂さんご夫妻、添田さん、松井さん、五十嵐さんご夫妻、宮本さんの奥様と美川夫婦の九名と、坐禅仲間の友人九名、それにベテランツアーコンダクターの神宮寺さんの男女総勢一九名で、平均年齢六五歳の気心の知れた仲間達。しかも、山好きで、高原に咲き乱れる可憐な草花の姿に魅せられた、心優しき仲間達だ。

スイスは国土の七割を山が占めるという山岳の国である。三〇〇〇〜四〇〇〇m級の雄大な山々や神秘的な大氷河、美しい森、清らかな水をたたえる湖、緑豊かな放牧地。豊かな大自然の魅力を楽しむには、ハイキングコースを歩くことに尽きる。

スイスアルプスの名峰巡りは、まず、世界屈指の名峰でスイスを象徴する山・マッターホルンをはじめ、四〇〇〇m級の山々が連なるお膝元の街、ツエルマット(一六八〇m)からスタート。ツエルマットはガソリン自動車を締め出し、美しい空気に満ちている谷奥のリゾートである。



大坂さんの描かれたマッターホルン

早朝の登山車でマッターホルン観光絶景ポイントのゴルナーグラードへ。ゴルナーグラードの展望台(三一三五m)からの眺めは、素晴らしいの一語に尽きる。毅然と聳えるマッ

ターホルンをはじめ、モンテ・ローザ、ブライトホルンなどの山々の景観と、雄大な氷河の眺望には、誰もが歓声を上げた。その後、ローデンボーデン駅(二八一九m)まで一駅戻り、湖に映える「逆さマッターホルン」が美しいリッフェルゼー(湖)から、足許に咲き乱れる小さな花々を愛でながら、リッフェルベルグ駅(二五八二m)まで花のハイキングを楽しむ。

翌日は地下ケーブルでスネガパラダイス(二二八八m)へ。スネガからはマッターホルンの裾野が美しく、最も優雅に眺められる。山上湖(ライゼー)も近い。素朴な風情が残る村落フィンドルン村を経て、麓のツエルマットまで下りのハイキング。さすがは酪農の国、途中飲んだミルクは大変旨かった。

午後は電車とバスとで、モンブラン山群と赤い針峰群(ブレヴァン、フレッジール)に囲まれた氷河谷の街・シャモニー・モンブラン(フランス)(二〇三五m)へ向かう。翌日はモンブラン観光。モンブラン山群の大パノラマが広がるエグユイ・デュ・ミディ(三八四二m)の展望台からのヨーロッパ最高峰のモンブラン(四八一〇m)の眺望はまさに感動もの。

(次号に続く)

◆◆ 会員便り ◆◆

一月二日に金沢・大乘寺の山主東隆眞老師を訪ねてお話を伺い、三日に京都の道元禪師所縁の地を巡る旅が、三五周年記念として行われることになりました。

東老師は元駒澤大学女子大学の学長を勤められ、椎名老師ともご親交の深い方で、仏教や禪に関する研究論文や著作を多く出されていらつしやいます。また、東老師

が書かれた「大乘寺を開いた徹通義介禪師」を漫画化されたり、「大乘寺のうた」を作詞されるなど、ソフトな方でもいらつしやいます。

因みに、平成二〇年に徹通義介禪師の七百回御遠忌を迎えます。紅葉の時期を迎える京都では、道元禪師が得度された比叡山横川や、明全禪師に師事された建仁寺、できれば宇治の興聖寺なども巡る予定です。皆様のご参加をお待ちしています。

龍泉院参禅会簡介

一、日時

毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、坐禅

第一炷 口宣、坐禅三〇分
経行 一〇分
第二炷 坐禅三〇分

一、講義

木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正法眼蔵』の提唱を聞く。現在「礼拝得髓」の巻

一、座談

自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散
年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、会費

無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は二月二・三日）釈尊成道を讃

一、一夜接心

え坐禅、成道会法要後、法話を聴取、点心を共にする
六月上旬（本年は六月一〇・一一日）一泊し、七
炷の坐禅とご提唱を聞く

沼南雜記

参禅会記録（内は座談の司会者
平成一八年

●三月二六日 三八名
（真崎 孝広氏）

●四月八日
山門改築落慶法要と開山
四五〇回忌に奉仕 一三名

●四月二三日 四四名
（大坂 晶子氏）

●五月二七日 二六名
坐禅・禅講後、筍掘り
（五十嵐嗣郎氏）

●六月一〇・一一日 二八名
一夜接心
於 天徳山龍泉院
幹事 杉浦上太郎氏
富沢 勇氏

●六月二五日 三一名
（武田 博志氏）

●七月二三日 三六名
（中罵 宏誠氏）

●八月二七日 二七名
（永野 昭治氏）

毎年頂上に登っている元氣なお爺さんには感心しました。

十年間での予定が二年オーバーしましたが、無念無想、こつこつと登った成果だと思えます。頑固ではない、元氣なお爺さんに倣いたいものです。（隆道）

▼龍泉院山門落慶式と報恩開山忌が四月八日土曜日に行なわれました。参禅会の有志がお手伝いをさせて頂きました。曇っていて雨の心配も何とかもって滞りなく無事終了致しました。新しく広い駐車場も沢山の車でしたが、参禅会のメンバーによる誘導でスムーズに行なわれました。山門の周りも模様替えが行なわれています。（添田）

▼「参禅って本当に不思議です。こんなことをしていてと思いがち……坐禅のヨサはまったく人間の思いでは測れない処に、測りきれない大きさであります。坐禅とはこういうものだ結論の出ないものであり、結論を出さない処にこそ坐禅のだからです。いつもこれでいいのかしらと思いがながら、とにかくやる。」内山興正老師のお言葉です。（添田）
▼特別号は編集の都合で、次号になりました。（秀嗣）